

● シリーズ 私の見た日本 Vol.216

中国と日本における建築と環境の関係の比較 中国東北部の都市「ハルビン」を例にする

王妍 (オウ ケン)



中国黒竜江省ハルビン市生まれ。2021年大阪電気通信大学工学部建築学科入学。現在同大学三年生

風が吹けば、枯れ葉が落ちる。
枯れ葉が落ちれば、土が肥える。
土が肥えれば、果実が実る。
こつこつ、ゆっくり。

これは映画「人生フルーツ」内の一節である。建築を学ぶようになってから、私も建築も自然のなかに存在していることを、より強く実感するようになった。

日本へ行くと決めたとときの不安から、この国の文化や環境に慣れること、そして大学に進学して建築を選んだこと。このようにたった数行で私の4年以上にわたる日本での生活は要約することができる。しかし、もし人生の経歴を曲線図で表すことができるとすれば、日本への留学を決めたことは私の人生における最大のターニングポイントだと思う。独立への第一歩とも言える一人暮らしやひとりでの決定も経験したが、幸いなことに、努力は必ず報われてきた。日本の大阪電気通信大学工学部で建築を学んで今年で3年目になった。専門知識を学ぶにつれて、建築から探求できる無限の可能性を感じている。小さな建物空間に大きな世界があることが理解できるようになってきた。

中国には「海納百川，有容乃大。」という言葉がある。海は無数の川を受け入れるからこそ、あれだけの大きさを持っている、という意味だ。私は、建築という学問はとても総合的なものだと思う。例えば建物ひとつを見て

も、建物を構成する素材だけではなく、それを取り巻く環境や使う人々の暮らしなど、目を向けるべきことはたくさんある。3年前の大学進学前の自分と比べて、建築の視界を通して世界を見ることを学んでから、そのような多角的に世界を見るようになった。

周知のように、建築は人間の生活と密接に関係する。人間が建物を創り、建築は人間に奉仕する。そして人も建物も、環境のなかにある。私も、そこから建築と環境の関係を探ろうとしている。

自然は形式的なものではなく、光は輝き、風は流れ、雨は体を通して感じることができる。「建築とは人々に自然の存在を感じさせるための媒介物だ。」と安藤忠雄氏は言うが、自然が人に感情を与えるのと同じように、建物も季節によって違った表情を見せるものだ。

また、自然には私にとって特別な存在がひとつある。それは中国の詩句では次のように表現されている。

「きっと天の妖精たちは酒を飲み、白い雲を砕いたに違いない。*」

これは、冬の雪のことである。

*中国の詩句「应是天仙狂醉，乱把白云揉碎」

遠くからの雪が風に乘って思いを伝える

私は「氷城」として知られるハルビンで生まれた。だから私にとって冬は、寒くて長いものである。地理的条件からくる冬の寒さのため、この都市は常に雪や氷と結びついている。

天候が寒くなり、空に雪が舞うようになると、道路沿いに雪と氷の彫刻が展示され、夜には氷彫刻の中に電球が灯り夜空を照らす。雪と氷から造形された特別な建物は、この都市の限られたロマンだ。冬のロマンチックな出会いのため、世界中からハルビンに人が集まる。

ハルビンの風は厳しいが、この土地の人々は誠実で温かい。このようなコントラストがあるから、この地域の雪は魅力的に感じるのだと思う。

日本の故郷

日本で初めて雪景色を見たのは白川郷だった。

雪はあるが、まだ暖かい寒さだ。当時の人々のニーズに合わせて山の中に作られ、今も村には人々が暮らしている。気候は最も自然な景観を与え、枯れ枝に雪が降り積もり、山の中に茅葺きの小屋が建っている。これは日本の原風景だと思う。屋根は三角形で、まるで本を開いて留めたような形にも見えた。大雪が降った後、合掌造りの屋根には分厚い雪が積もり、茅葺き屋根の家はどれも、子どもの頃におとぎ話で見たジンジャーブレッドハウスを拡大したような姿になる。坂道を歩いていると、軒先の雪が突然滑り落ちることがあるが、歩行者に当たることはない。降雪量が多く雪が厚い白川郷の自然条件に完璧に適応している。これが合掌造りの知恵なのだ。街並みは似ていないが、静かで純真な



白川郷の雪



上/清水寺 下/ハルビン中央大道



心斎橋筋商店街

の雪景色は、私に故郷のハルビンを思い起こさせた。山の中にあるこの世界遺産は、森の中で見つけた宝物のようだった。その名の通り両手を合わせた形である合掌造りの屋根の下で、ここにいる人たちはきっと幸せに暮らしていると思う。

人々の心に根付く建築

「郷に行っては郷に従え」に則り、留学生が最初にするこのひとつは、神社に入って入学を祈願することだ。

京都には神社が多いし、古典的な雰囲気がある。道に沿って小さな建物があり、空にそびえ立つビルもない。大都会のような圧迫感がなく、ゆっくり休むこともできる。

京都でも有名な清水寺への道はずっと上り坂で、道の両側には商店街があり、通りには木造家屋が並び、清水の舞台は懸造りという工法を使って木で作られている。清水の舞台の建築には釘を一本も使っていないのに、今も丈夫な建築として残っている。また、「清水の舞台から飛び降りる」ことは、何かをやり遂げるためのとても強い決意を表現している。人々にとって確固たる意味を持つ象徴的な場所となっているのだ。さらに、清水の舞台は冬には厳しい自然の中にある。このような冬の雰囲気のなかで、荘厳さはさらに大きく感じられるだろう。

散らばった雪片が地面に落ちなくても、信仰は人の心に着地する。

中国と日本の商店街

商店街は都市の雰囲気を実に表し、さらには都市の歴史を覗く窓のような重要な役割を担っているとも言える。

アジア最長の商店街は、ハルビン中央大道である。そこは東洋と西洋が融合したような美しさがある。通りにはバロック様式やネオ・ルネッサンス様式の建物が建ち並び、足元には100年前の道路建設業者によって一つひとつ舗装された花崗岩が敷き詰められている。東洋の小パリとも呼ばれているのはこの街並みに由来している。この商店街にはハルビンとロシアの名物料理や特産品が並び、ハルビンのランドマークとなっている。

日本では大きな商店街のひとつに心斎橋筋商店街が挙げられる。大阪最大の繁華街として、ブティックや専門店が集中している。アーケード施設もあり、西洋の建築様式のファサードも見られる。街全体からより親しみやすい雰囲気を醸し出している。素晴らしい夜景と美しいネオンも心斎橋筋商店街の見どころだ。

ハルビンと心斎橋との文化や歴史の違いはあるものの、どこことなく人を呼び込む力を感じる。現代社会において、商店街は都市を知る手がかりのひとつであると考えられる。

私の見た日本

日本は厳格さと秩序を重んじる国である。そのため日本のまちづくりにも秩序が感じられる。小さな空間の建物にも個性があり、まちづくりの間口は細部まで豊かだ。シンプルで平行なオープン・テラスやベランダ、階段などのオープン・エレメントは、建築の秩序感を大いに高める。数多くの建築が融合して地域の都市的意図を形成し、そこからユニークな都市コンテクストが構築されている。

建築を学んでから世界の見え方が変わったように、私が見ているものや感じることは、私の経験に基づいている。冬に生まれ、寒い土地で育ったからこそ、雪に対する思いは深い。だから、日本で雪が降らない日はいつも寂しい気持ちになる。白川郷の純真さ、京都の荘厳さ、そして心斎橋の賑わいは、私が冬に抱く最も強い感情と故郷を思い出させる。私たちはまた、建築と環境の関係を通して、建築をより良く理解することができる。これらは、私が建築を勉強して感じていることである。

故郷について遠くから客観的に考えたり、自分自身が様々な経験を積むことで、建築とそれを取り巻く世界に対する視野を日々広げられていると思う。日本に来てこのような環境のなかで建築を勉強できるのは素晴らしいことだ。



ハルビンの中央大道



雪の彫刻



氷の彫刻